師匠と一夜

【完】ワンナイト・ホラー　１０

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18898321

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, エク霊, もぶお兄さん×霊幻

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の１０話目です。今回で一応の完結になります、お付き合いありがとうございました！子供が少ししゃべります。また、エロはありません。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

阿頼耶は芹沢の子供ですが、隔世遺伝でちょっとびっくりするレベルの美貌をしています。聖なる属性の力が強く、永崇と相性が悪いのですが、兄弟仲はいいです。

【完】ワンナイト・ホラー　１０

何となく芹沢の顔を見るのが辛くて、子供たちを連れてよく公園に出るようになった。
大きくなってきたお腹をさすりながら、一緒に砂遊びをする長男と次男を眺める。
「霊幻さん……っ」
切羽詰まった声に振り返ると、森羅と同じような法衣に身を包んだみーくんがいた。
「やっと準備が整いました。逃げましょう！！」
逃げ、る？
何故だろう。そんなこと、考えたこともなかった。
長男と次男が異変を察知して俺の足元に近づいてきて、マタニティズボンをぎゅっと握りしめる。
「なんですか、その子供たちは……おぞましい」
そう言うみーくんにムッとする。
「可愛い俺の子供達だ。そんな風に言わないでくれ」
「……っ、霊幻さん、その子たちは危険だ。早く離れて、俺と逃げましょう、さあ！」
子供たちを置いて？みーくんと逃げる？？
――不可能だ。
「みーくん。俺のお腹の中には、３人目がいる。すでに能力者であることは分かってる」
それに。
「ダンナの居ぬ間に間男きたりて嫁攫い、ってか。おい若造、俺と永崇に喧嘩売るとは、今度は命が惜しくないとみえる」
タバコから戻ってきたエクボが俺の腰を抱き寄せながら目を緑に光らせる。
次男もぶわ、と全身を緑に光らせた。
「……っ、今度こそ霊幻さんを助けるって決めたんだ……！！」
じゃららら、と水晶で出来た呪具をみーくんが構える。
「オンっ！！」

左手でお札を６枚取り出し、エクボに向かって投げる。
「ベイシラ、マンダヤ、ソワカ！！」
「ぎゃああああああっ！！」
ぴたりとお札がエクボに張り付き、お札の周りから煙が上がっている。
「おとうさん」
次男が心配そうにエクボを見ている。
「やってくれたなぁ……！！小僧、俺様に本気で勝てると思ってんのかぁ……！？……大丈夫だ、永崇」
エクボが優しく次男の頭を撫でる。
「思ってないさ。オンベイシラマンダヤソワカっ！！」
「ぐああああああっ！！」
エクボがもがき苦しむ。
「アンタみたいな上級悪霊には足止めが関の山だ。オンベイシラマンダヤソワカ！！……っさあ、今のうちに！霊幻さん！！」
今なら、
逃げられる？
フラフラと俺はみーくんの手を取ろうとして。
がくん、と。
足に長男と次男がしがみついてきて、歩き出せなかった。
「オカアサン……」
ドロ、と次男の目から、真っ黒な涙が溢れてくる。
「オカアサン、僕ヲ捨テルノ……」
ドロ、と長男の目にも。
「捨テナイデ……オカアサン」
「オカアサン……」
「ひ、っ──」
ドロドロと黒いものが長男や次男の身体中から溢れてくる。
「霊幻さん、離れて！ソイツらも捕縛します！」
「……っ、ダメだみーくん！茂隆や永崇に手を出さないでくれ……！」
みーくんが投げたお札を子供たちを庇って背中で受ける。じゅう、と激痛とともに、背中が焦げる臭いがした。

「お母さん！」
次男がドロドロを引っ込めて悲鳴を上げた。
「……よくも霊幻に怪我させてくれたな？」
エクボの足元にお札が焼け落ちていく。
「みーくん逃げて──！」
「『潰れろ』」
言霊一言、圧倒的な実力差だった。
みーくんは全身から嫌な音をさせて地面に埋まる。
「かはっ……」
血を吐いた。肺にダメージを食らってる。
「さぁてと。２度ならず３度もこちらを脅かしてくれたんだ。覚悟は出来てるよなぁ……？」
ポケットで１１９番に繋いだままま、エクボに口付ける。
「お願いだ。みーくんを見逃してくれ」
「だぁめだ。お前を攫おうとした」
「もう二度とみーくんの手を取ろうとしない。だからお願いだ。俺を愛しているのなら」
ぴくり、とエクボの眉が上がる。
「俺のお願いをきいてくれ」
「……仕方ねぇな」
俺の携帯から情報を拾った救急車が公園に駆け付ける。
担架で運ばれていくみーくんに、心の中で永遠のさよならを告げた。
ありがとう、さよなら、と。

※

言わなきゃバレるはずがない。
この子は芹沢の息子だ。
俺はそう自分に言い聞かせながら、病室を訪れた芹沢を笑顔で迎える。
「わ、この赤ちゃんの柔らかい感じ、慣れないなぁ」
我が子を抱く芹沢が、首のすわっていない赤子を怖がってすぐコ

フィンに戻す。
「霊幻さん、お疲れ様でした」
ローストビーフをこっそり渡してくる芹沢に苦笑する。
「名前、影山くんやエクボくんとも相談しながら、考えてきたんですけど」
がさがさと芹沢が半紙を開く。
「阿頼耶（あらや）、ってのはどうですか。仏教用語なんですが」
「いいんじゃないか？どういう意味なんだ？」
芹沢の顔から笑顔が消えて。
「『俺は全てを知っています』」
時間が凍った。
「…………それに近い意味だと思うんですけど、阿頼耶や阿頼耶識についてエクボくんからきいても、難しくて。とにかくありがたい名前だそうです」
「そ、うか」
バクバクと心臓が跳ねる。
「阿頼耶、阿頼耶の目は切長で綺麗だなあ」
芹沢が薄ら笑う。
「誰に似たんだろうなあ」
芹沢は、こんな風に笑うやつだったか……？

それからの生活は針の筵で。

阿頼耶の存在が、確実に家庭の中をギスギスさせていた。
「……っそんなに俺を疑うなら、遺伝子検査をしてみればいいだろう！？」
我慢できなくなってネグレクト気味な芹沢に言う。
「……もし、阿頼耶が俺の子じゃ無かったら」
虚な目をこちらに向けてくる。
「このあたり一帯の無事は保証できませんが、それでもいいですか」
「……っ、臆病者……っ！」
あれから、律くんとは何も無い。

穴が空いていたコンドームと芹沢の中出しとだったら、芹沢の子供の確率の方が圧倒的に高い。
でも。
どこか律くんに似ている阿頼耶を、直視できない自分がいるのも真実だった。

ため息をつきながら相談所で古い領収書の整理をする。相談所での仕事が今は癒しだった。
「ホチキス、ホチキス……と」
大きな引き出しの中を探って。
「ん……？」
四つ折りの半紙が手に当たる。
「これは……モブたちが俺にかけた呪い……？」
「「燃やして」」
長男と次男が声を揃えて言う。
「だうっ」
三男が触るとそこから半紙が燃え上がり、慌てて灰皿に乗せた。
半紙は油でも染み込ませていたのかという勢いで燃えて。
俺はその炎をぼんやりと見ていて、

目が覚めた。

携帯を取り出して松上さんに連絡を取る。
「子供３人と暮らせるシェルターはありませんか」
『霊幻さん……！ご連絡をお待ちしておりました。九州の超能力研究施設が受け入れをずっと申し出てくれていました。対超能力者への防衛設備もあります。……今から向かえますか』
俺は子供たちを振り返る。
「今からちょーっと長い遠足だ」
「お父さんから逃げるんでしょ？」
次男が言う。
「パパたち異常だからなあ」
長男が苦笑する。

「「お母さんは僕たちと逃げた方がいい。サポートは任せて」」
心強い子供たちだ。
俺は財布と携帯だけ持って役所が手配してくれたタクシーに乗り込む。
「パパたちが追えないように誤魔化すから、ちょっとそっとしておいてね」
子供たちはそっと３人で手を繋ぐ。
「「「自由の神様、僕たちに力を貸して、さてもあはれ、自在天、体自在を得たり、自由自在、自由自在……」」」
ぶわ、とバリアがタクシーを包む。
おまえら、兄弟喧嘩しなくなったな……と感動を覚えた。
それにしても、俺は何をやっていたんだろう。
あいつらに監禁されているのが普通だと思い込んでいた。あんな不自由を看過していたなんて、今からは信じられない。

あいつらも、結果的には俺からしたら、所詮ワンナイトに過ぎなかったというのに。

俺の愛するモブ、エクボ、芹沢。

どうか１晩の夢なんか忘れて、幸せな人生を歩んでくれ。

※

〜Side影山茂夫〜

すすらえぎうにけにてち。

さな゛やちつやうてすらぬ……！

「霊幻さん霊幻さん霊幻さん霊幻さんああああああああ」

「落ちつけシゲオ、芹沢！だぁいじょうぶだ。子供の目眩しなんて大したこたぁない。場所ならもう分かってる。だからヒトをやめるな……！！」

ししょうなるやな゛たれ？

「防衛施設に逃げ込んだみたいだが、なぁに」

「俺たちなら一晩で焦土だよ」

完